

「常陸秋そば」を支える種子の生産と新たな栽培技術の導入

茨城県農業総合センター農業研究所 松浦 和哉

1. はじめに

茨城県産「常陸秋そば」は、大粒で粒揃いが良く風味に優れ、品質日本一との呼び声高いそばです(写真1、2)。県北山間部の畑地では、手作業中心の栽培が行われており、10月半ば頃には、刈り取られたそばが畑に島立てもしくは地干しされ天日で乾燥される風景(写真3)が見られます。また、県央・県西・県南地域の広大な畑地および水田転作畑では大型の農業機械利用による効率的なそば栽培(写真4)が行われており、茨城県における「常陸秋そば」の作付け面積は平成21年で2,260haに達しています。昨今の生産現場の特徴的な動きとしては、産地および生産者が実需者(そば店を含む)の多様な品質ニーズに応えるべく、新たな栽培法の導入、きめ細かい玄そばの水分調整、低温および真空状態での玄そば保存技術の導入等、様々な手法を取り入れて経営の向上を図っていることが挙げられます。ここでは、「常陸秋そば」の安定生産を支える種子の生産体制と実需者ニーズに応えるための新たな技術導入の取り組みについてご紹介します。

2. 「常陸秋そば」の種子生産について

そばは、短柱花と長柱花の2種類の花の間で受

粉がなされる他殖性作物であり、稲や麦と比べて、自然交雑により品種の特性が変化しやすい作物といえます。そのため自家採種を繰り返すと品種特性の変化を招く恐れがあり、定期的に種子を更新する必要があります。

風味の優れる「常陸秋そば」の礎となる種子は、県、(社)穀物改良協会、全農いばらき、JA茨城



写真2 常陸秋そばの玄そば



写真3 手刈り後地干しされたそば(常陸太田市)



写真1 収穫の時期を迎えつつある「常陸秋そば」



写真4 汎用コンバインで収穫されるそば(桜川市)

みどり、JA 茨城みずほ等の関係機関が協力して生産しています。まず農業研究所の原原種生産圃場で生産・厳選された種子を、さらに県北地方の山あいの採種農家の畑（写真5、6）で細心の注意を払いながら2年かけて増殖します。こうして生産された純粋な種子が、翌年、栽培農家の手元に届くこととなります。

「常陸秋そば」は、種子生産に携わる人々の努力と確かな経験によって、育成当時と変わらぬ姿を維持しているのです。

3. 生産現場での新たな技術導入の取り組み

1) そばの風味の良さをさらに活かす早期収穫技術

そばは開花期間が1ヵ月近くにおよび、ミツバチやハナアブ等の訪花昆虫によって受粉がなされ、株の中程から上位の節に向かって実が熟していきます。収穫時期は、圃場全体を見渡して何割程度の実が黒変しているか（黒化率）を目安とします。この黒化率は、1日あたり3～4%程度上昇しながら100%に近づいていきます。



写真5 採種農家のそば畑①
(常陸大宮市)



写真6 採種農家のそば畑②
(常陸大宮市)

コンバインによる機械収穫の場合、収量や作業性を踏まえて、黒化率90%程度での収穫が最適とされてきましたが、従来の収穫適期より1週間程度早い黒化率70%程度の時期に収穫すると、収量はやや低くなりますが、抜き実およびそば粉の緑色が強くなります（図1、写真7）。さらに、当研究所で行った食味試験（早期収穫と従来どおり（黒化率90%程度）収穫したものとの比較）でも、早期収穫したそばを使用した「そば切り」の方が、見た目および香りが優れる傾向にありました（写真8）。

県内の生産現場、特に県央・県南・県西部を中心とした広大な畑地帯では、この「早期収穫技術」を経営の一部に取り入れることで、抜き実の緑が強いものから、いわゆる適期収穫した完熟粒の多いものまでを取り揃え、実需者ニーズに柔軟に対応できる販売体制を作り上げてきている生産者、団体等が増えています。

また、この「早期収穫技術」を汎用コンバインを用いて実施する場合、茎葉の水分が高い状態での収穫となるため、従来の収穫方法では機内に作物が詰まり連続作業が困難となります。そこで、生産現場では、コンバイン内部の受け網を従来より粗いものにし、二番還元流量を制限する等の改良を加えて、連続作業を実現しています。

一方、コンバインによる早期収穫技術からは話が逸れますが、冒頭にも述べたとおり、県北地域の中山間部で営まれているそば栽培では、黒化率が低い時点での手刈り収穫が行われています。今回の技術開発結果を鑑みますと、県北地域の「常陸秋そば」は、昔から抜き実の緑色の強さを残した状態での収穫が実践されてきたといえます。全国的に高い評価を得ている産地であることの理由の一つといえるかも知れません。

2) 夏季のそば需要期出荷を可能とする春播き栽培

そばの作柄は秋期の天候に左右されやすく、年間をとおした供給が不安定になりがちです。さらに実需者からは、夏季のそば需要期における「新そば」の供給が望まれています。しかし、「常陸秋そば」という評価の高い品種が作付けされている本県において、これらのニーズに応えるための夏型品

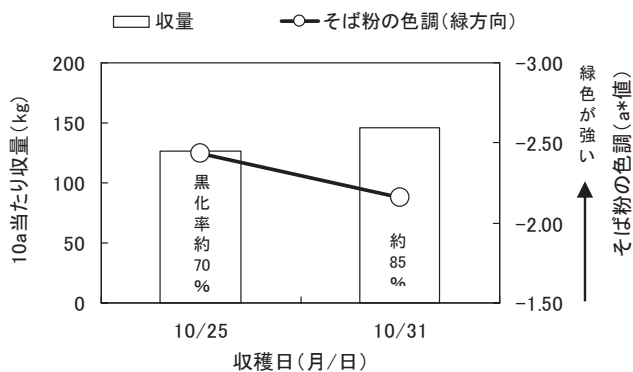


図1 収穫日・黒化率と収量・そば粉色調との関係
試験場所：茨城県農業総合センター農業研究所



写真7 そばの黒い殻を剥いた「抜き実」



写真8 うっすらとした緑が美しい「そば切り」です。

種を導入した場合、「常陸秋そば」との交雑による問題が懸念されます。そのため、生産現場および当研究所では、「常陸秋そば」による春播き夏どりの栽培技術の開発に取り組んできました(写真9)。

これまでの試験結果をここに述べてみます。

(1)「常陸秋そば」の春播き栽培における播種適期は、収量および降霜のリスク等を考慮し、4月中下旬であり、45kg/10aを上回る収量が得られる(雀害が無い場合の数字)。ただし、この数字は、本来の夏播き栽培時の1/2~1/3程度である。

(2)「常陸秋そば」の春播き栽培の収穫適期は7月中旬であり、黒化率70~80%で収量が安定して高く、穂発芽粒の発生が少ない。また、軸流型コンバインで春播き「常陸秋そば」を収穫するため

には、そば用コンケーブを装着するとともに、チャフシープ遮蔽板や二番スロワ流量軽減装置など二番スロワの詰まりを防ぐ改良が必要である。なお、これらの対策を講じても機内に作物体が詰まり連続作業が困難になることがあるため、刈り高を高くする、刈り幅を狭くする、作業速度を遅くする等の工夫が必要である。

(3)春播き栽培の収穫作業で漏生したそばの対策としては、収穫直後の耕耘方法の違いにかかわらず、8月下旬に再度耕耘することで稔実を抑制することができる。

この結果から、春播き栽培のメリット(夏季のそば需要期に「新そば」として販売できる)とデメリット(収量性が低く、播種後の降霜によるリスク、収穫時の穂発芽発生リスク、雀害によるさらなる収量低下等)を踏まえた上での導入および価格設定が必要なが明らかになりました。非常に厳しい栽培条件ですが、この春播き栽培を取り入れて有利販売につなげている生産者もあり、新たな作付け体系を取り入れた経営モデルを示していただいているところです(写真10)。

4. おわりに

茨城の「常陸秋そば」は、ここに紹介した種子生産および栽培に携わる方々はもちろんのこと、集荷・販売に携わる方々、そば切りの原料として使用するそば店や自らそば打ちを楽しむ県内の愛好者の方々など、さまざまな人々の思いとともに成長してきました。

本県のそば文化を支える「常陸秋そば」をこの機会にあらためて注目していただければ幸いです。



写真9 春播き栽培の播種期移動試験の様子



写真10 生産現場における春播き「常陸秋そば」(古河市)